

社会とのつながりを考え続ける児童の育成

川口市立鳩ヶ谷小学校教諭 田 崎 美 奈

I 研究主題について

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」(平成28年8月)において、子供たちの現状として「人の役に立ちたい」と考える割合が増加傾向にあるものの、「自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながる」という意識が他国に比べて低いことが指摘されている。

このような状況を踏まえ、新学習指導要領には、急速な社会の変化に伴い、予測が困難な時代に生きる児童に「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」という目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力」が必要であると示された。また、小学校社会科の目標には「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な社会を形成する公民としての資質・能力の基礎」を育成することが示されており、この資質・能力は小学校から段階的に育成し、選挙権年齢に達する頃には十分に育っていることが望まれる。

そこで、本研究では、このような社会を生きるために、社会とのつながりを考え続ける児童を育成することが必要であると考えた。社会とのつながりを考えるとは、以下のように定義する。

社会とのつながりを考えるとは、学習したことと自分たちの関連を考えたり、よりよい社会をつくっていくためにはどうすればよいのかを考えたりすることを、学習だけでなく、学習を超えて生涯にわたって続けていくこと。

II 研究の仮説

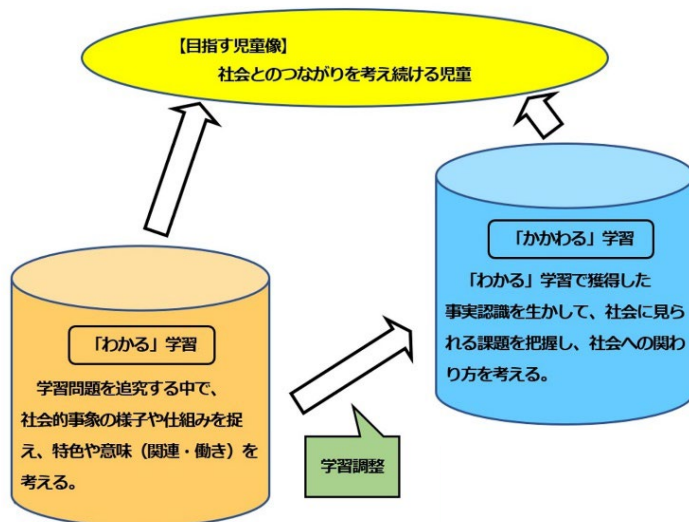
研究主題の実現に向け、研究の仮説を以下に設定した。

社会認識を形成する学習や、社会認識を生かして社会参画する学習を行うことで、社会とのつながりを考え続ける児童を育成することができであろう。

まず、社会認識を形成する学習では、学習問題を追究する中で、社会的事象の様子や仕組みを捉え、特色や意味(関連・働き)を考えさせる。本研究では、この学習を社会が「わかる」学習と呼ぶことにする。

次に、社会認識を生かして社会参画する学習では、社会が「わかる」学習で獲得した事実認識を生かして、社会

に見られる課題を把握し、社会へのかかわり方を考えさ



【資料1 鳩ヶ谷小学校研究の構想図】

上図のように「わかる」学習で完結するような学習もあれば、「わかる」学習から「かかわる」学習へ移行していくものもある。「わかる」学習から「かかわる」学習に移行するためには、児童が自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤することが有効であると考えた。本研究では、これらを「学習調整」と呼ぶことにする。

III 研究の手立て

研究の仮説に基づき、手立てを以下のように設定し

手立て1 社会が「わかる」学習における手立て

- (1) 学習問題に対する予想を基にした学習計画の作成
- (2) 社会的事象の意味や特色を考えさせる学習過程

手立て2 社会に「かかわる」学習における手立て

- (1) 学習してきたことを生かした「かかわる」学習活動
- (2) 立場を明確にした「かかわる」学習活動
- (3) 「かかわる」学習につながる学習調整場面の設定
- (4) 社会に「かかわる」学習の系統化

社会とのつながりを考え続ける児童を育成するためには、社会認識を形成するための社会が「わかる」学習、社会参画するための社会に「かかわる」学習の双方を展開

する必要がある。それは、社会が「わかる」学習で習得した社会的事象の様子や仕組みを生かすことで、そこで生じる社会に見られる課題を把握することができ、社会に「かかわる」ことができるからである。これらの手立てを基に授業実践を行った。

IV 授業実践

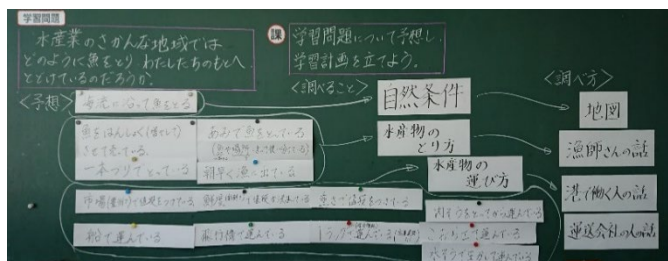
1 社会が「わかる」学習における実践

手立て(1) 学習問題に対する予想を基にした学習計画の作成

〈5年「水産業のさかんな地域」〉

児童が社会認識を形成するためには、概念的知識を獲得しなければならない。概念的知識はいくつかの具体的知識によって構成されており、概念的知識を獲得するために、教師は指導要領の目標や内容に沿って、具体的知識を獲得するための学習内容や学習方法を精選することが求められる。しかし、教師が一方的に概念的知識を獲得するまでの道筋を提示してしまうと、児童の追究の見通しは立つものの、主体的に学びたいという意欲は低下してしまう。そのため、児童が追究の見通しをもち、かつ主体的に学ぶためには、学習問題に対する予想を基にした学習計画の作成が必要である。

本時では、学習問題「水産業のさかんな地域では、どのように魚をとり、わたしたちのもとへ届けているのだろうか」に対する予想をさせ、予想を分類・整理したうえで、調べること・調べ方についても考えさせた。



【資料2 学習計画を作成した実践の板書】

児童は、学習問題に対する予想を生活経験や既習を基に考える。考えた予想は、学習していく具体的知識の一部となっていることが多い。そのため、予想を分類することで、学習問題を解決するために、どのようなことを調べればよいかが可能となる。本時では「一本釣り」「朝早く漁に出ている」「船で運ぶ」などの予想が出た。これらの予想を基に、児童が具体的知識を獲得できるようにするために、「水産物のとり方」、「水産物の運び方」と分類した。

また、それらをどのように調べたらよいかを考えた。本時では水産物のとり方を調べるためには漁師の話、水産物の運び方を調べるためには、港で働く人や運送会社の人の話が必要であると話し合った。

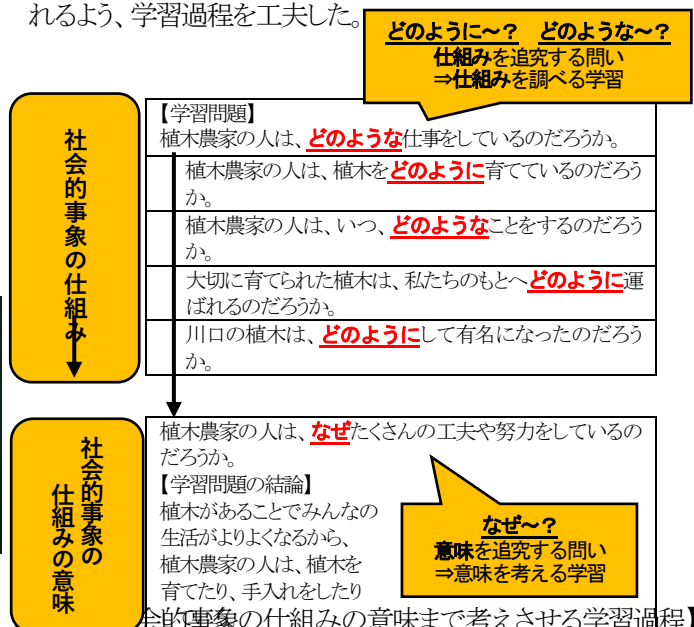
予想を基に、調べること(調査内容)と、調べ方(調査方法)を明確にし、これらを学習計画として進めた。学習問

題に対する予想を基にした学習計画を作成したことで、学習追究の見通しをもつことができ、主体的に学習に取り組みながら、必要な知識・技能を習得することができた。

手立て(2) 社会的事象の意味や特色を考えさせる学習過程

〈3年「植木を育てる仕事」〉

本実践では、社会的事象の仕組みを調べるために、「植木農家の人は、どのような仕事をしているのだろうか」を学習問題とした。また、一単位時間の学習課題を「どのように〜」「どのような〜」と仕組みを追究する問いの設定をした。また、社会的事象の仕組みを調べた後、「植木農家の人は、なぜたくさんの工夫や努力をしているのだろうか」と問うことで、社会的事象の仕組みの意味を考えられるよう、学習過程を工夫した。



社会的事象の仕組みについて調べ、児童は学習問題に対し、「植木農家の人は、たくさんの工夫や努力をして、大切に植木を育てている」と考えていた(資料4 )。そこで、仕組みの意味を考えさせるために、植木があるよさや植木農家の働きについて話し合い(資料4 )「植木農家の人は、なぜたくさんの工夫や努力をしているのだろうか」と問いかけた。これらの活動や発問によって、「植木があることでみんなの生活がよりよくなるから、植木農家の人は、植木を育てたり、手入れをしたりしている」という結論を導き出した。



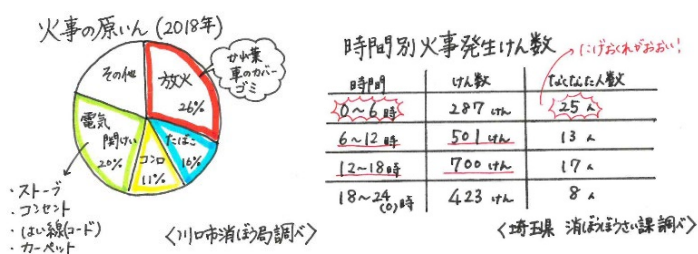
【資料4 社会的事象の仕組みの意味まで考えさせた板書】

2 社会に「かかわる」学習における実践

手立て(1) 学習してきたことを生かした「かかわる」学習活動

〈3年「火事からくらしを守る」〉

本実践では、学習問題「火事を減らすために、だれがどのようなことを行っているのだろうか」を解決するために、消防署や地域、市役所の人々の活動について調べ、結論を導き出した。その後、学習してきたことを生かして、自分たちにできることを話し合い、自分に最も協力できることを選択・判断した。



【資料5 調べる過程で学習した資料】

だれの？ 消防士の人、市役所の人、消防団の人

自分はどう協力できる？

ねている部屋やキッチンなど、
に火事か起きたら、
音が鳴るのをすぐ知らせる
ので、おちをよびかけたい
と思います。あと、電気を
使わないようにしたいです。
(お)き(き)は(お)け(け)に(お)け(け)に

どんな取り組み？

火さいぼうちき
ちちのよけに協力できる！

【資料6 児童のワークシート①】

だれの？ 消防士の人、市役所の人、消防団の人

自分はどう協力できる？

自治会の見回りにさんか
して、しに声をかけ
たいと思いました。
理由は、消火器をつ
かえなくても、声かけなら
できるからです。

どんな取り組み？

自治会の見回り
に協力できる！

【資料7 児童のワークシート②】

資料6、7は、火事を減らすために自分が最も協力できることを選択・判断したワークシートである。資料6には、火災報知器を寝ている部屋やキッチンに設置すると書かれており、前時までに学習した、深夜の火災は逃げ遅れ

が多いことや、コンロ付近での火災がある(資料5参照)という学習内容を生かしていると考えられる。また資料7には、消火器は使えなくても、声かけならできると書かれており、学習を通して、今、自分が消火器を使うことは難しいと考え、学習したことの中から、より協力しやすい「自治会の見回り」を選択したと考えられる。

手立て(2) 立場を明確にした「かかわる」活動

〈5年「米づくりのさかんな地域」〉

本実践では、学習問題「庄内平野で米づくりをしている人々は、どのようによりよい米を生産しているのだろうか」を解決するために、庄内平野の自然条件や、米づくりに携わる人々の工夫や努力について調べ、結論を導き出した。その後、米づくりの現状と課題について調べ、これからの米づくりの在り方について話し合った。



【資料8 立場を明確にした実践の板書】

農業従事者の減少や、耕作面積や消費量の減少等により、「米づくりが続けられなくなり、米を食べることができなくなるかもしれない」という社会に見られる課題に目を向けた。この社会に見られる課題には、生産者側、消費者側のそれぞれの立場に問題点があることを明確にし、それぞれの立場における解決に向けた取組について、インターネットを活用して調べた。その後、自分たちが調べた取組を基に、その効果を説明し、グループで話し合いをした。以下はその一部である。

- C1: 僕は米の輸出をさかんにした方がいいと思う。日本の米の品質は高いから、世界でも米を食べている国では、買ってくれる人がいると思うよ。だから生産者が工夫することが大切だと思う。
- C2: 確かにそうかもしれない。私は生産者が工夫しやすくするためには、会社化することが必要だと思う。輸出するにしても、一件の農家が外国にお米を売ることなんて難しくできないと思う。
- C3: 二人は生産者の取組が大事だって思っているけれど、まず私たちがお米をもっと食べることが大切だと思う。
- C1: お米を食べるっておかわりするってこと？
- C2: そうじゃなくて、給食の米粉パンのように、米粉を使った商品を買うとか、家で作ってみるとか。
- C3: それなら誰でもできそうだね。
- (中略)
- C2: つまり、生産者も消費者もそれぞれが取り組んでいけば、日本の米づくりが続いていけるってことだね。

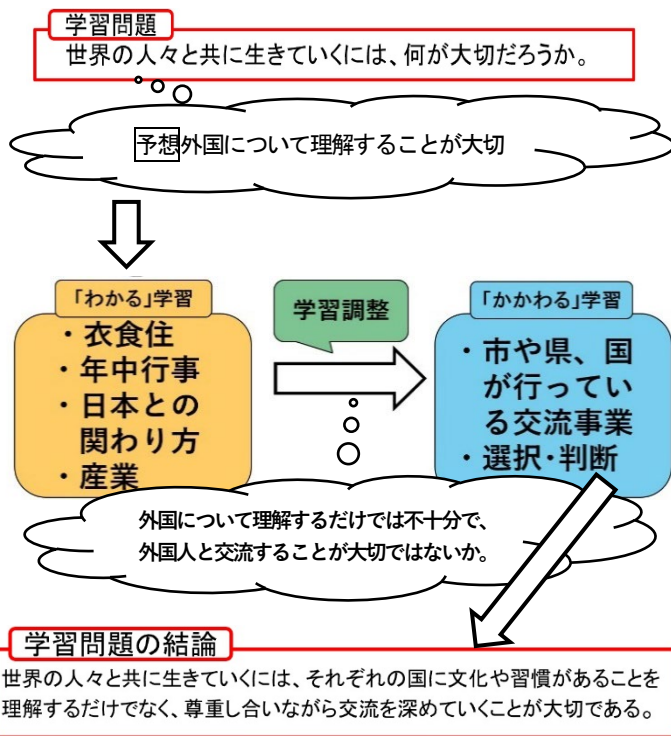
生産者・消費者のように立場を明確にして取組を調べ、異なる立場に立って話し合いをしたことで、社会に見られる課題の解決に向けて多角的に考えることができた。

この話し合いの後、自分の考えをまとめる活動を行った。そこには、生産者、消費者それぞれの立場の取組も大切であるという記述が多く見られた。

手立て(3)「かかわる」学習につながる学習調整場面の設定

〈6年「日本とつながりの深い国々」〉

学習問題「世界の人々と共に生きていくには、何が大切だろうか」を解決するために、日本とつながりの深い国の文化や習慣を調べ、「世界の人々と共に生きていくためには、それぞれの国の文化や習慣を理解することが大切である」とまとめた。そこで、川口市における外国人居住者と地域住民のトラブルの事例を提示することで、「文化や習慣を理解するだけでは共に生きていくことは難しい」ということに気付かせ、「理解するだけでなく、交流することが必要である」という新たな視点に気付かせた。これらの活動により、学習調整が図られ、外国人との交流について調べる活動へ移行していった。



【資料9 「わかる」学習から「かかわる」学習への調整場面】

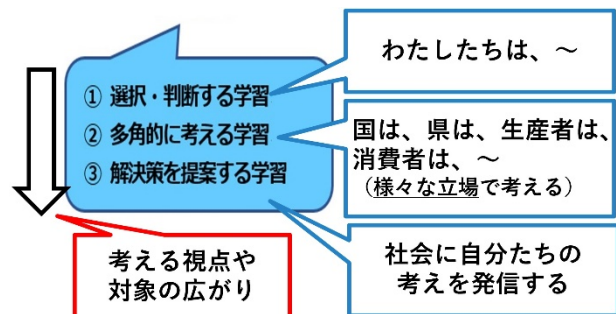
上図のように、「わかる」学習で、文化や習慣について調べた後、学習調整によって、外国人との交流について調べる、「かかわる」学習に移行した。「かかわる」学習では、市や県、国が行っている外国人との交流事業を調べた。これらの「かかわる」学習が加わったことによって、「世界の人々と共に生きていくためには、それぞれの国に文化や習慣があることを理解するだけでなく、尊重し合いながら交流を深めていくことが大切である」という結

論を導き出した。

学習調整によって、地域住民が外国人居住者と交流をしていくことが大切であるということに気付くことができたため、本小単元の振り返りでは、世界の人々とのかかわり方を考えることができた。

手立て(4) 社会に「かかわる」学習の系統化

本校では、社会に「かかわる」学習が行える単元を、新学習指導要領の「内容の取扱い」に沿って設定することとした。そのうえで、考える視点や対象の広がりによって、①選択・判断する学習②多角的に考える学習③解決策を提案する学習の3つに分けた。



【資料10 社会に「かかわる」学習の系統化】

①選択・判断する学習

〈4年「くらしと水」〉

選択・判断する学習は、調べてきたことの中から、自分たちに協力できることなどを考え、社会への関わり方を選択し、判断していく学習である。

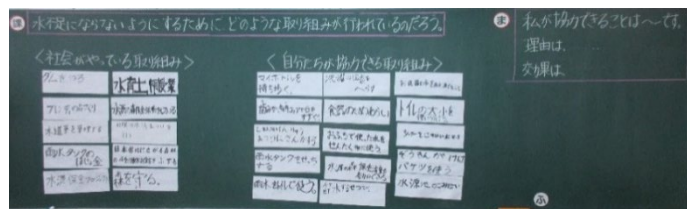
本実践では、学習問題「わたしたちが使う水道水はどこでつくられ、どのように送られてくるのだろうか」を解決するために、水道水の供給経路や浄水の仕組み、関わる人々の働きについて調べ、結論を導き出した。その後、水道水の仕組みが整っているにも関わらず、渇水になることが多いことから、「埼玉県は水不足になることが多く、いつでも水が使えないことがある」という社会に見られる課題を把握した。社会に見られる課題の解決のための取組については、インターネットを活用して調べた。

水不足にならないようにする取り組み	
4年 組 番 名前	
取り組み	歯みがき時コップで口をすすぐ。
だれが行っているか	私たち
調べた理由 (今までの学習とのつながり)	水不足にならないために私たちができることとして、調べてみて水不足をなくし水を大切にすることが大切だと分かりました。
調べた結果	1日約5.4L 1ヶ月で約1.296L 節約される。 そうすることで浄水場できれいにした水を大切に使うことができます。
調べた資料 (本・サイト)	TOTO

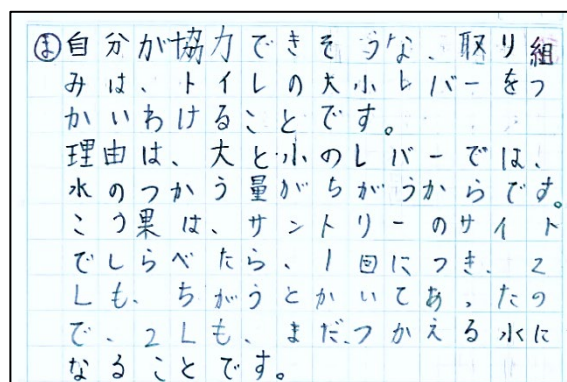
ワークシートは「どんな取組なのか」「だれが行っているか」「調べた理由」「その取組の効果」「調べた資料」について書けるように作成した。

【資料11 児童が調べたワークシート】

調べた取組を基に話し合うことで、「社会が行う取組」「自分たちが協力できる取組」に分類し、「自分たちが協力できる取組」の中から、自分が協力できることを選択・判断させた。

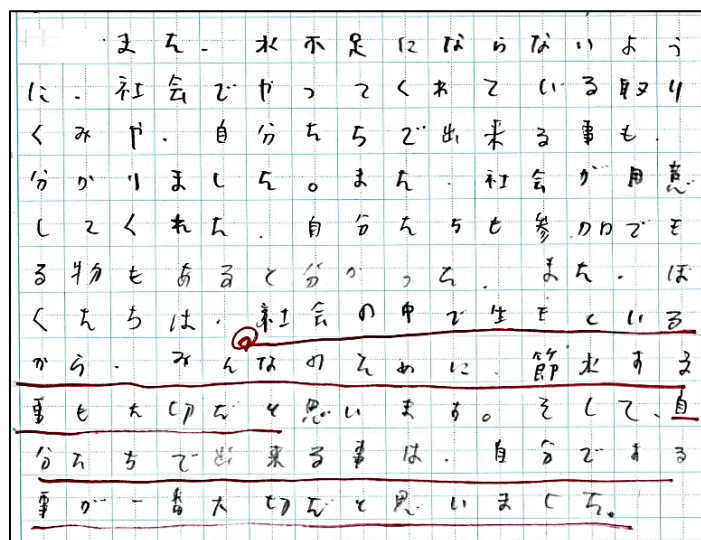


【資料12 選択・判断する学習における板書】



【資料13 児童の記述①】

資料13は、水不足にならないために自分が最も協力できることを選択・判断した記述である。この児童は、トイレの大小には1回につき2Lもの量の差があることから、トイレの大小のレバーを使い分けことが自分に協力できることだと考えている。また、小を使うことで2Lの水が他のことに使えるとの記述から、水不足を解消するためのより効果的な方法であると考え、選択したと考えられる。



【資料14 児童の記述②】

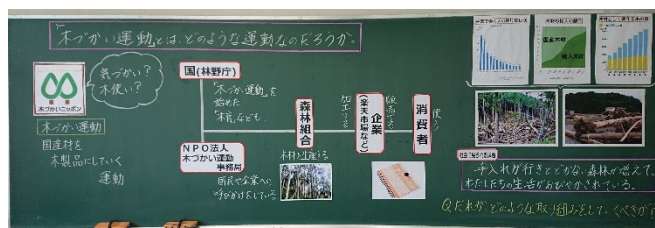
資料14は、本小単元の振り返りである。この児童は企業や地方自治体などの社会が行う取組だけでなく、自分たちが協力できる取組もあることに気付いている。また、自分たちでできることは、自分することが一番大切だとの記述から、社会の一員として自覚が芽生えてきていると考えられる。

②多角的に考える学習

〈5年「わたしたちの生活と森林」〉

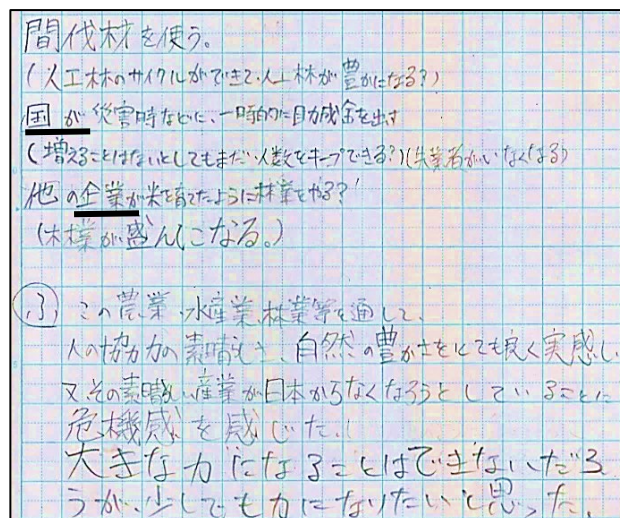
多角的に考える学習は、国や県、消費者や生産者など、様々な立場からできることを調べ、よりよい社会の在り方を考える学習である。

本実践では、学習問題「森林にはどのような働きがあるのだろうか」を解決するために、天然林や人工林の働きについて調べ、結論を導き出した。その後、「木づかい運動」を事例に調べ、国やNPO法人、森林組合や企業、消費者などの様々な立場の人たちが森林を守ろうしていることから、「手入れが行き届かない森林が増えることによって、様々な問題が引き起こされている」という社会に見られる課題を把握した。



【資料15 多角的に考える学習における板書】

社会に見られる課題を把握した児童に、「だれがどのような取組をしていいたらよいか」と発問すると、児童は以下のように記述した。



【資料16 児童の記述】

「国が～」「企業が～」のように、様々な立場から考えていることが分かる。また「(人工林のサイクルができて、人

工材が豊かになる)」など、()の中には、その取組を行った時の効果まで考えることができた。これは関係図を活用して考えることが、立場を明確にし、多角的に考えることにつながったと捉えている。さらに、食料生産の学習において学んだ「農家の企業化」の取組を基に、「林業の企業化」を進めていくことについて考える児童もいた。

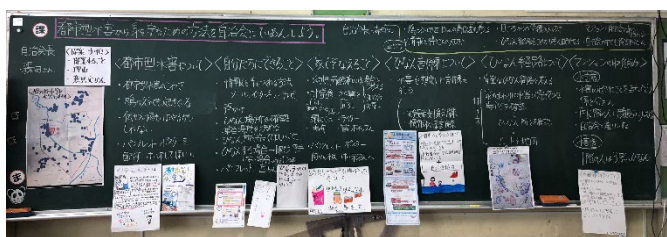
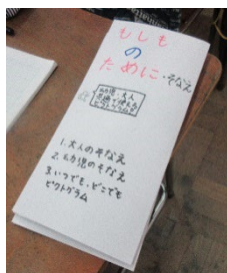
③解決策を提案する学習

〈4年「水害から人々を守る活動」〉

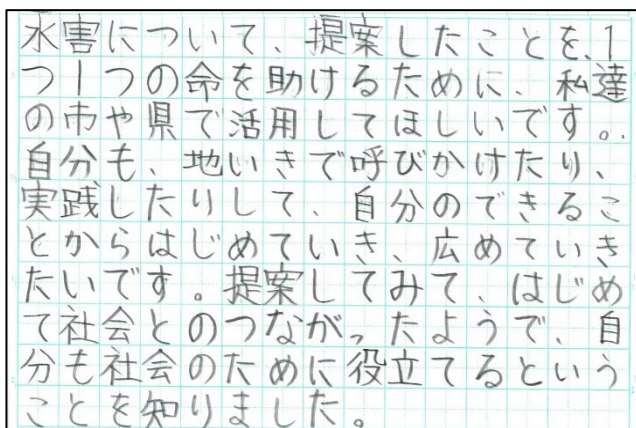
解決策を提案する学習は、調べた取組を基に**社会に自分たちの考えを発信する学習**である。

本実践では、学習問題「水害からわたしたちのくらしを守るために、だれがどのようなことをしているのだろうか」を解決するために、国や埼玉県、川口市や地域の人々の活動について調べ、結論を導き出した。

その後、「川口市は都市型水害への対策が不十分であり、安全に生活することができない」という社会に見られる課題を把握し、新たな学習問題として「都市型水害から身を守るための方法を自治会に提案しよう」を設定した。他地域で行われている取組を基に調べ、児童は提案内容、提案理由、効果についてまとめ、自治会に提案する活動を行った。



【資料17 解決策を提案する学習の授業の様子】

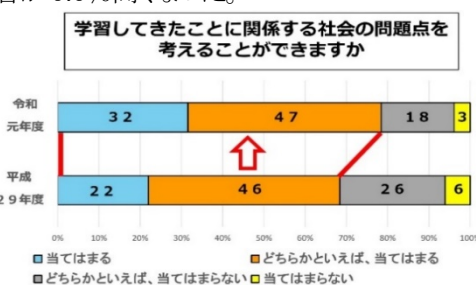


【資料18 児童の記述】

解決策を提案する学習を行うことで、よりよい社会をつくっていくためにどうすればよいのかを真剣に考えることができた。また、資料18の単元の振り返りから、これらの学習が社会の一員としての自覚や、自分も社会の役に立てるのではないかと自己有用感を養うことにつながったと捉えている。

V 成果・課題

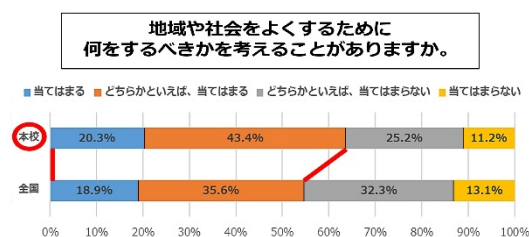
本校で行った第3学年以上の全児童を対象とした調査から、意識の変容を読み取る。平成29年度と令和元年度の結果を比較すると、「学習してきたことに関する社会の問題点を考えることができますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えた児童の割合が9.6%高くなった。



【資料19 アンケート結果①】

また、「社会科の授業で学習したことは役に立ちますか」「将来日本をよりよい社会にしたいと思いますか」という質問に対し、80%以上の児童が肯定的に捉えている。

さらに、全国学力学習状況調査では、「地域や社会をよくするために何をするべきかを考えることがありますか」という質問に対し、肯定的な答えを出した児童の割合が全国平均より9.2%高くなっている。



【資料20 アンケート結果②】

そして、「日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいと思いますか」の質問に対しては、82.6%の児童が肯定的に捉えている。

以上の結果から、本校の児童の社会とかかわろうとする意識は高まっていることが分かる。つまり、社会が「わかる」学習や、社会に「かかわる」学習を行うことで、社会とのつながりを考え続けるための素地ができたと言える。

しかし、社会とのつながりを考え続けるためには、小学校だけではなく、中学校・高等学校との学びの接続を考えていく必要がある。このような学習を、系統的か

つ継続的に実践していくことが、社会とのつながりを考え続ける子供たちの意識をさらに高め、将来の社会参画へつながっていくと考える。

〈参考文献〉

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版, 2018 年
- ・文部科学省「次期指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」2016 年
- ・北俊夫『社会科学力をつくる“知識の構造図”―“何が本質か”が見えてくる教材研究のヒント―』明治図書, 2011 年
- ・澤井陽介『授業づくりの設計図』東洋館出版社, 2020 年
- ・桐谷正信「授業の目的・あり方→新視点で考える」『社会科教育』8月号, 明治図書, 2014 年, pp.58-59